琉球大学学術リポジトリ

シュタイナーとフランクル : 再生をめぐって

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2018-08-01 キーワード (Ja): シュタイナー, フランクル, レッシング, 不死, 再生 キーワード (En): 作成者: 寺石, 悦章, Teraish, Yoshiaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42157

シュタイナーとフランクル
再生をめぐって

Wiedergeburt oder Wiederverkörperung,
Versuch über einen Vergleich
zwischen R. Steiner und V. E. Frankl

寺　石　悦　章
Yoshiaki TERAISHI

シュタイナーとフランクルは中心的な活動分野こそ異なるものの、その思想には多くの類似点が見出される。本稿では不死と再生、中でも再生に注目して、両者の思想を比較考察する。

両者はいずれも、自我または人格（あるいは精神）が死によっては崩壊せず、死後も存続すると考えている。またそのような存在が再び身体を備えて生まれてくることを認めている。このような意味において、両者は不死と再生を認めていると言って差し支えない。とはいえ 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて流行した心霊研究に対してはきわめて批判的であり、自らの立場をそれとは明確に区別している。その最大の根拠は、心霊研究の手法が唯物論的であって、精神を研究する手法として適切でないという点にある。

人間は経験を重ねることで向上・進歩・進化するというのが、両者に共通する基本的な態度である。一度の人生はそのための期間としてあまりに短いが、再生によってそのためのさらなるチャンスが与えられる。フランクルの再生の思想はこの点に集約されている。

彼らよりも前の時代に、理論的に再生思想にたどり着いたレッシングがいる。彼のそれも向上・進歩・進化の思想であり、再生に積極的な意義を認める。一方で輪廻といえば仏教思想がその代表とされてきた。しかしそれは解脱、すなわち再生しないことを目標とするもので、再生に積極的な意義を認めていない。シュタイナーは自らの考えに適うものとして、仏教ではなくレッシングの思想を高く評価する。

キーワード：　シュタイナー　フランクル　レッシング　不死　再生

1 はじめに

シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861～1925）とフランクル（Viktor Emil Frankl, 1905～1997）の思想には多くの類似点が見出される。筆者はまず、両者の思想の比較研究を行うための基盤づくりを行った上で[1]、精神（Geist）と心魂[2]（Seele）をめぐる両者の思想について[3]、次いで死と不死をめぐる思想について検討した[4]。それらを踏まえ、本稿では再生をめぐる両者の思想を取り上げて比較考察する。

以下では「再生」および「不死」という言葉が頻出するため、先にこれらについて簡単に説明しておこう。

ここでいう不死とは、死後も人間の構成要素の一部（ここでは精神・自我・人格‥‥）が存続することである[5]。これについては一般に不死の他、死後生存、死後生命、永遠の生命、永生など、多少ニュアンスを異にする種々の表現があるが、本稿では引用などの場合を除き、原則として「不死」を使用する[6]。このような不死を認めた場合、死とは直接には人間の構成要素の一部に限定されたもので、かならずしも人間の構成要素全体に直接関わるものではないことになる。別の言い方をすれば、死によって身体（Leib）など一部の構成要素は崩壊するものの、崩壊せずに存続する構成要素もあるということになる。

---

1 〔寺石 2016〕。

2 「心魂」というあまり一般的でない語を使用するのは、「精神」や「身体」と同様に漢字二文字で音読みになるので収まりがよいこと、また直前に付加語を置きやすい（「○○的心魂」など）といった実用的な理由が大きい。またこの語が Seele、さらにはギリシア語の phychē に対応すること含意しやすいといった理由もある。

3 〔寺石 2017a〕。

4 〔寺石 2017b〕。

5 したがって「不老不死（＝いつまでも老いない、死なない）」などという時の不死とは意味が異なる。

6 上記の「不老不死」など、異なった意味でも使用されるという点では、適切な語とはいえない面もある。そのような語をあえて使用するのは、さまざまなニュアンスがつきまとうことを避けるため、できるだけシンプルな語を使用したいというのが最大の理由である。また一般に「死」の対極と考えられている「生」の文字を含まない方がよい（語義矛盾を避けたい）と考えたことも理由の一つである。

またここでいう再生とは、不死である人間の構成要素の一部（ここでは精神・自我・人格‥‥）が、再び身体を備えて生まれてくることである。これについても再生の他、再受肉、生まれ変わり、輪廻、転生、輪廻転生など、多少ニュアンスを異にする種々の表現があるが、本稿では引用などの場合を除き、原則として「再生」を使用する[7]。

不死と再生は区別される。不死は再生を前提としないが、再生は不死を前提とする。（一部の構成要素が不死でなければ、それが再生することは不可能である。）ちなみにキリスト教やイスラームでは、一般に不死は認められているものの再生は認められていない。一方、ヒンドゥー教や仏教では再生が認められているため、その前提となる不死も当然認められている。

さて個々の思想を検討する前に、不死と再生をめぐるシュタイナーとフランクルの思想を、特に共通性・類似性に注目して概観しておこう。詳しくは後述することになるが、両者はいずれも不死と再生を認めている[8]。のみならず両者は比較的共通性の高い根拠に基づいて、それを主張している。ただし重点の置き方には大きな違いがあり、それが具体的な表現のレベルでの大きな差異になっていると考えられる。

使用する語彙が大幅に異なることなどもあって厳密な表現はできないが、両者が再生を認める根拠は、大きく三点あるといえそうである。これを A～C としてまとめると次のようになる。

A　人格・自我と身体は互いにかなりの程度まで独立している。

B　人間（人類）は経験を重ねることによって向上・進歩・進化する。

C　各々の人格・自我は他と異なる唯一の、かけがえのない存在である。

順に説明しよう。まず A だが、両者はいずれも、人間は精神・心魂・身

---

[7] 「古紙再生」など、物質にも（かなり異なったニュアンスで）使用されるという点では、適切な語とはいえない面もある。そのような語をあえて使用するのは、「不死」の場合と同様、さまざまなニュアンスがつきまとうことを避けるため、できるだけシンプルな語を使用したいというのが最大の理由である。「輪廻」や「転生」など、宗教的なニュアンスの強い用語を避けた方がよいと考えたことも理由の一つである。

[8] シュタイナーが不死と再生を認めていることは確実である。フランクルの場合、「再生がある」といった明確な表現こそ見出せないものの、その発言内容から、再生があることについては認めていると考えられる。詳しくは後述する。

体の三つの構成要素[9]からなるとする。このうち身体は死によって崩壊するものの、人格・自我あるいは精神は永遠である[10]。人格・自我と身体は互いにかなりの程度まで独立しており、身体が崩壊したからといって人格・自我が崩壊するとまではいえない。つまり、いわゆる死の存在はもちろん認めているものの、それによってすべてが終わるわけではない。この点は主に不死の根拠となる。

B は生きる目的や意味、さらには再生する目的や意味とも深く関わる。両者とも、人間は生きて経験を積むことによって向上・進歩・進化すると考えている。しかしその程度は、短い一生の間ではごくわずかでしかない。人間が向上・進歩・進化を続けていくためには、あるいはより高いレベルに達するためには何度も人生を繰り返すこと、すなわち再生が必要となる。

C は少々わかりにくいが、やはり再生と深く関連する。身体の場合、ある素質を親や先祖から受け継ぐことがあり得る。しかし精神については各人が独自のものをもっている。それを他者から譲られるといったこと（遺伝など）は考えにくい。したがって精神自体の再生が不可欠だと考えられる。

以上、簡単に A～C について見てきたが、フランクルはこの中の A を強調する。B はこれと関連づけて語られることはないものの、暗黙の前提になっていると推測される。また C については、そのこと自体は認めるものの、この問題と関わらせてはいないと見られる。一方シュタイナーは、この中の B と C を強調する。A についても明確に認めてはいるものの、それほど強調していない。

---

[9] この三つの要素はギリシア語ではそれぞれ nūs（または pneuma）, phychē, sōma に、ラテン語ではそれぞれ spiritus, anima, corpus に対応する。このうち nūs（ギ）, spiritus（ラ）, Geist（独）は「精神」の他に「霊」とも、また phychē（ギ）, anima（ラ）, Seele（独）は「心」の他に「魂」とも訳される。本稿では本文中にもある通り、基本的に「精神」「心魂」を使用する。

なお「霊」や「魂」といった語は必ずしも宗教的な文脈においてのみ使用されてきたわけではない。たとえば古代ギリシア哲学の文献では phychē が「魂」と訳されることが圧倒的に多い。

[10] 心魂についての見解はやや異なる。フランクルの見解ははっきりしないものの、身体とほぼ同時に心魂も崩壊すると考えているらしい。シュタイナーの場合、心魂は死後数十年存続し、その後で崩壊すると考えられている。

2 当時の不死・再生研究への批判

シュタイナーもフランクルも不死と再生を認めている。しかしいわゆる心霊研究に対してはきわめて批判的な態度をとっており、それが自らの立場とは異なることを強調している。

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての欧米では、不死・再生への関心が特に高まっていた。不死・再生についての研究といえば、一般に非科学的・非学問的といったイメージで捉えられがちである。しかしこの時期には、不死・再生を含む「心霊現象[11]」を科学的に研究しようという気運が高まり、1882 年には世界で初めての学術団体がロンドンに成立する[12]。「心霊研究協会」（SPR＝Society for Psychical Research）が正式名称だが、後になって同様の組織が他の国にも作られたため、しばしば「イギリス心霊研究協会」と呼ばれる[13]。この協会では念力、自動筆記、幽霊屋敷、テレパシーなど、さまざまな「心霊現象」が研究されていた。

また当時は交霊会（降霊会）が流行していた。多くの場合、出席者は数名から十数名で、一人の霊媒を招く。その霊媒が、出席者と関係する「霊魂[14]」、あるいは故人となった著名人の「霊魂」などを降ろして会話するといったもので、その他にもさまざまなヴァリエーションがあった。

このような心霊研究や、交霊会などの心霊術は、しばしば人々によって「霊魂」の存在、言い換えれば不死（場合によっては再生）を証明する重要な証拠だと主張されていた。しかしシュタイナーとフランクルの場合、両者とも

---

11 現在、この表現は研究者の間ではほとんど用いられていない。

12 設立の発案者は、当時の指導的なスピリチュアリスト（心霊主義者）であった E. ドーソン・ロジャーズだと言われる。彼がアイルランド・ダブリンの王立科学カレッジ物理学教授のウィリアム・バレットに相談し、ケンブリッジ大学の著名な倫理学教授であったヘンリー・シジヴィックを初代会長として協会が誕生する。

13 協会のメンバーにはアーサー・バルフォア（1902～1905 年のイギリス首相）やレイリー卿（アルゴンガスの発見者でノーベル化学賞受賞者）、J. J. トムソン（電子の発見者でノーベル物理学賞受賞者）、シャール・リシェ（パリ大学医学部生理学教授、ノーベル生理・医学賞受賞者）、ウィリアム・ジェームズ（アメリカ・バーバード大学心理学科教授）、ウォーレス（博物学者・地理学者）、オリヴァー・ロッジ（イギリスを代表する物理学者）、アンリ・ベルグソン（フランスの哲学者でノーベル文学賞受賞者）、コナン・ドイル（「シャーロック・ホームズ」シリーズの作者）など、たくさんの著名人が含まれていた。

14 ここでは世間一般の用法に従い、この語を漠然と用いている。

不死と再生を認めているにもかかわらず、自らの立場を心霊研究などから明確に区別している。それどころか、これらを厳しく批判している。批判の最大のポイントは、これらの研究の手法が唯物論的だという点にある。

シュタイナーもフランクルも、人間は精神・心魂・身体（≒物質）からなるとする。全体で一人の人間であることはもちろん認めるものの、精神と物質は大きく異なるものだと捉えている。現在[15]は唯物論全盛の時代であり、物質以外の存在は一般に認められにくい。そのため、人間にとってもっとも重要な構成要素であるはずの精神の存在が、認められにくくなっていると考える。

研究がどれほど物質中心になったとしても、唯物論的な手法を用いて精神を研究するのは不可能に近い。（完全に不可能とまでは言わないが、ほぼ不可能である。）にもかかわらず、上述の心霊研究や心霊術は、間違いなく唯物論の立場から行われている。このことが、これらに対して両者が批判的な態度をとる最大の理由である。

心霊研究や心霊術では、手を触れずに物質を動かしたり、非物質的なものを物質化したり、自動筆記させたりと、何らかの物質的な変化が生じることを何よりも重視している。そしてこれこそが「霊魂」が実在する証拠だと主張する。しかしシュタイナーやフランクルによれば、精神が物質に影響を与えられるかどうかといった物質次元の事柄を基準に、精神の存在を確認しようという発想そのものが根本的に間違っている。精神は物質とは（まったく無関係ではないにしても）基本的には異なる要素であり、物質を対象とするのと同じ発想で精神を研究することはできない。これが両者に共通する立場だということができる。

2.1 フランクル

フランクルは不死と再生を認めているが、そのような自らの見解を心霊術（心霊研究）などと混同しないように特に注意を促している。心霊術も不死を（場合によっては再生をも）認めており、フランクルと同様の立場に立っ

[15] ここではシュタイナーやフランクルの時代を含む。

ているようにも見えるが、彼によれば両者の態度はまったくといってよいほど異なっている[16]。

なお念のため言っておきますが、ここで唯心論（Spiritualismus）と言っているのは、心霊術（Spiritismus）とは別であります。心霊術にはそれ独自の特徴があるからです。しかし、平たく言えば、心霊術とはまさに一種の雌雄同体と見ることができます。つまり、心霊術は、主題という点では唯心論的と見なされますし、方法的には唯物論的であります。またそれは、その対象という点ではまったく唯心論的であり、その立場としては典型的な唯物論なのであります。

ここでフランクルは「雌雄同体」という表現を用いている。心霊術は、精神を対象にしているという点では、精神を探究するフランクの立場と共通する面があることは否定できない[17]。しかしその手法は、前述の通りあまりに唯物論的だというのである。その典型は、「霊魂」のような精神的なものを物質化するという手法である[18]。

つまり、心霊術は霊的なものから準物質的なものを創りだす、などと平気で言うわけです。この事態は、それゆえ、心霊術は精神的なものを物質化する、と表現されてもよいでしょう。このため、心霊術は、精神史的に見れば、自らも好んでいうように、それ自体一つの「物質化現象」であるということになります。

心霊術では、非物質的なものを物質化する（何もないところに物質を出現させる）ようなことが好んで行われていた。同時に、このような物質的な現象こそが精神的なものが存在する証拠だと見なされていた。これは精神を精神のままに捉えようとはせず、精神を物質というレベルで、物質に置き換えて捉えることに他ならない。フランクルは、そのような態度こそが精神の物質化だと指摘する。そしてこのようなことを行う心霊術者は、物質的なものの背後(あるいは根底‥‥)に精神的なものを見ているわけではなく、まさに

---

16 〔LM, 78〕〔フランクル 2000, 33〕。
17 だからこそ同類とみなされる可能性があるわけで、フランクルは両者を混同しないようにと注意を促している。
18 〔LM, 78〕〔フランクル 2000, 33〕。

物質的なものそのものを見ているのだと指摘する[19]。

また次のようにも述べている[20]。

> この問題でとくに指摘しておかねばならないことは、いわゆる心魂の遍歴（Seelenwanderung）ということで一般に理解されているものが、心魂の遍歴とか精神的人格の遍歴ということではなく、まさしく幽霊（Geister）の遍歴である、ということであります。

短い表現であるため発言の意図を正確に汲み取るのは難しいが、おそらくは次のような意味であろう。ここでいう幽霊の遍歴（これが心魂の遍歴とも呼ばれ得る）というのは、死後に幽霊となった人間が生きている人間と接触するなど、さまざまな行動をとることを指すのであろう。フランクルが死を超えて精神が存続すると主張すれば、そのような世間のイメージと混同される可能性があるため、それとはまったく別の事柄だと注意をうながしているものと考えられる[21]。後述するように、フランクルの考える再生はこのようなものとはまったく異なる。

一般論としてではあるが、再生を認めることが生命を軽視することにつながるといった批判がある。「ある人を殺したとしても、その生命が再び生まれてくるのであれば殺したことにはならない」といった考え方である。また「現在」「今」を軽視することにつながるといった批判もある。中断があるにせよ、いつまでも生きることと同じであるから、なすべきことがあったとしてもいつまでも先延ばしが可能になるというのである。しかしフランクルの再生の考えには、上記のような批判はあてはまらない[22]。筆者は別稿においてこの点について論じているが[23]、重要なことなので簡潔に繰り返しておこう。

---

[19] 〔LM, 78〕〔フランクル 2000, 34〕。

[20] 〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 187〕。

[21] ここでフランクルは「心霊術（Spiritismus）やオカルティズム（Okkultismus）、人智学（Anthroposophie）や神智学（Theosophie）が『アストラル体と結びつける』『幽霊（Geister）』は、われわれが『精神的なもの（Geistig）』と呼んでいるものと決して同一ではありません」と述べている（〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 187〕）。

[22] フランクルが人生を肯定的に生きるべきことを主張していることは、周知の通りである。〔SWL〕〔フランクル 1993〕および〔TJLS〕〔フランクル 2002a〕などを参照。

[23] 〔寺石 2017b〕。

再生があると聞けば、我々は現在の人生が死後にも存続するような想像をしてしまいがちである。しかし身体は確実に死滅する。身体にまつわる容姿なども当然失われる。家族関係も財産も失われる。精神の存続（再生）の自覚がないことをフランクルも認めているが、これは誕生前の別の人生（いわゆる前生・前世）の記憶が失われていることを意味すると考えるのが適当だろう。だとすれば次の人生には、精神が存続していることを除けば何一つ受け継がれていないといって過言ではない[24]。したがって現在の人生が死後も存続するようなイメージで捉えるとすれば、それはフランクルの意図に反するものとなる。「現在の人生」は死によって間違いなく終わるのである。

とはいえ、このような態度は一般に理解されにくい。大多数の人々にとって死は恐怖であり、可能であれば死の存在を否定したいとまで望んでいる、といってよいだろう。不死を認めているにもかかわらず、それをことさら強く主張せず、一般には死が存在するという立場に立というとするのはなぜだろうか。実はフランクルは、死には積極的な意味があると考えている[25]。なぜなら人生に終わりがなければ、どんなことも先延ばしにできる。となれば、そのことによって人生は無意味になってしまいかねないからである[26]。

フランクルは、人生という単位でその意味を考えることをしない。意味とは、その時、その状況において存在するものであって、人生全体の意味などという壮大なものは、人間には理解できないという立場をとる。したがって彼がいう意味とは、常にその時、その状況における個別的な意味である。そのような意味は、人生が有限か無限かとは関わりがない。その時に意味がなければ、それをどんなに長くしたところで意味は生じない。これがフランク

---

24 このような点はシェーラーの見解と非常に近いといえるだろう（〔TF〕〔シェーラー1977〕）。

25 〔LM, 212〕〔フランクル 2004, 142〕など。

26 ただしこれは文字通り無意味になるわけではなく、意味が減少する、価値が低下するといったことだと考えられる。別の箇所では「重要ではなくなり」という言い方をしている。「というのも、もしわれわれの人生が時間的に有限ではなく、無限であるとすれば、どうなるであろうか。もしわれわれが不死であるとすれば、当然ながらわれわれは、あらゆる行為を無限に先延ばしすることができるのであって、それをまさに今行うことはまったく重要ではなくなり、明日、明後日、あるいは一年後、十年後に行っても同じことになってしまうであろう」（〔ÄS, 119〕〔フランクル 2011, 146-147〕）。

ルの立場だといえる[27]。

2.2 シュタイナー

シュタイナーもフランクルと同様、心霊研究における手法が唯物論的であるとして批判している[28]。

> 心霊研究の方法は外的な仕方で、受動的に、精神的存在とその働きを感覚的に探ろうとします。この純粋に外的な立場をとる心霊研究は、いったい何の子どもでしょうか。一元論の立場に立ち、唯物論を信じ込んでいる、あの精神潮流の子どもなのです。

一元論にもさまざまなものがあるが、ここで述べているのは精神的なものや心魂的なものを否定する形で物質のみを認める、唯物論的一元論である。人間は精神・心魂・身体からなると考えるシュタイナーは、もちろんこのような立場を否定する。

シュタイナーは、このような唯物論的一元論を導くのに力のあった人物としてヘッケル（Ernst Heinrich Philipp August Haeckel, 1834～1919）とオストヴァルト（Friedrich Wilhelm Ostwald, 1853～1932）の名前をあげる[29]。実は、シュタイナーとヘッケルの間には親交があり、シュタイナーはヘッケルの一元論的発想そのものは高く評価している。したがって、ここで批判しているのは一元論的発想そのものではなく、あくまでも一元論的な唯物論的発想である[30]。

---

27 「それ自体として無意味なものを継続させることは、それ自体が無意味である。なぜなら、それ自体として無意味なものは、それが永年化されたというだけで意味あるものになったりはしないからである。(〔ÄS, 123〕〔フランクル 2011, 151〕)」。

28 〔IWM, 31-32〕〔シュタイナー2006, 33〕。

29「この立場の総指揮者は偉大な自然学者ヘッケルであり、その戦闘隊長はオストヴァルトです。彼らは自然科学によって得られる認識内容をひらすら拡げることによって、ひとつの世界観を打ち建てようとしました」(〔IWM, 29〕〔シュタイナー2006, 30〕)。

30 本文中でも述べた通り、シュタイナーとヘッケルの間には親交があった。シュタイナーはヘッケルの一元論的発想そのものは高く評価しており、次のように述べている。「筆者は、『ヘッケルとその敵対者たち』において、偉大な自然思想家ヘッケルを敵対者たちから擁護したのである。本書の筆者がヘッケルの前提を越え出ており、世界についての精神的な見解をヘッケルの単に自然的な見解に並列するとしても、それゆえにヘッケルの敵対者たちと意見を一致させる必要はないのである。ものごとを正

彼はまた次のようにも述べている[31]。

> ‥‥単なる物質信仰によって、物質化した幽霊たち（Geister）への信仰が生み出されているのです。純一元論的な唯物論が成長すればするほど、その必要な対称物として、心霊主義者協会（Spiritistengesellschaft）や心霊主義的世界観が栄えるでしょう。ヘッケルやオストヴァルトの信奉者は、真の精神科学を否定すればするほど、真の精神研究の裏側にある心霊主義（Spiritismus）を育成することになるでしょう。精神の研究者は認識可能な精神について知識を得ようと努めますが、そう努めれば務めるほど、精神を物質化しようとする方法に従うことができなくなります。唯物論的な仕方で精神的生活を受動的に探求することができなくなるのです。

なおシュタイナーもフランクルと同様、再生を認めつつも「現在」「今」を生きることを重視している。たとえば、誕生から死にいたるまで存在する意識を個人意識（Persönlichkeitsbewußtsein）、誕生から死にいたる生涯を超えて存在する意識を個性意識（individuelle Bewußtsein）と名づけ、両者を区別して論じている個所がある[32]。ここからはシュタイナーが「人生は死によって終わる」という事実（個人意識に対応）と、「不死である」という事実（個性意識に対応）を区別しつつも並立させようとする意図が明確に読み取れる。

フランクルは、先延ばしは許されないといった態度を示しているが、シュタイナーにもそれに似たことを述べている個所がある[33]。そもそもシュタイナーは、人間は新たなことを学ぶために再生するという立場をとっている。そのような立場からすれば、ある人生は、その人生でしか学べないことを学ぶために存在するわけで、その学びを怠って次の人生に回すといったことは

しく見ることに努める人は、筆者の現在の著作と以前の著作との一致に、気づくことができる（〔GWU, 12〕〔シュタイナー1992, 15〕）」。ここで批判の対象となっているのは、あくまでも唯物論的発想である。

30 〔OK, 25-26〕〔シュタイナー1996, 19-20〕。

31 〔IWM, 32〕〔シュタイナー2006, 33〕。

32 〔OK, 25-26〕〔シュタイナー1996, 19-20〕。

33 〔IWM, 67-68〔シュタイナー2006, 73〕。

許されない[34]。

3 フランクルにおける「再生」

次にフランクルにおける再生の思想を見ていくことにしよう。彼は不死も再生も認めてはいるものの、それを積極的に語ろうとはしてない。いわば必要最低限しか語っていないため、その少ない発言から彼の真意を読み取る必要がある。

彼は精神的なものの不死に関して、次のように述べている[35]。

> なぜなら、精神的なものが身体的なものから何らかの意味で独立しているということは、まさに毎日毎時われわれに生じていることだからであります。このことは、例えば深い眠りや深い麻酔の際に、心魂的－精神的生命が認められなくても、身体的生命は持続しているということを考えれば分かります。つまり、心的－精神的連続性のない身体的連続性のようなものが存在するわけです。そうだとすれば、反対に、幾つもの身体的存在を超えて持続する、何らかの精神的連続性が存在しないということがどうしてありうるでしょうか。

ここでフランクルは「幾つもの身体的存在を超えて持続する」と語っている。これは同一の精神が複数の身体的存在の中に宿ること、すなわち再生を意味していると読み取ることができる。つまりフランクルは精神の不死のみならず、再生があると考えていることになる。

一般にキリスト教では、不死までは認めるものの再生は認めない。つまり身体を失った心魂（あるいは精神）は天国[36]で永遠に生きると考えられているが[37]、その心魂が再び別の身体に宿るとは考えられていない。フランクルが信じるユダヤ教の場合、もともとの死後観念ははっきりしないが[38]、その

---

34 「心魂がふたたび生まれてくるのは、新しい地上生活の中で新しいことを体験するためなのですが‥‥」（〔IWM, 68〕〔シュタイナー2006, 73〕）。

35 〔LM, 132〕〔フランクル 2000, 185〕。

36 天国と神の国の関係など、厳密にいえば論じるべき点は多々あるが、本題から外れるため、ここでは一般的な「天国」という語を用いておく。

37 もちろん地獄に堕ちる可能性もあると考えられている。

38 ユダヤ教聖書（≒旧約聖書）によれば、人間は土と神の息によって作られている。死後、土からなる身体は土に戻り、神の息からなる精神は神のもとに帰ると漠然と考えられていたとも言われる。

後はキリスト教の影響などもあって同様の考えも受け入れられている。ただし、やはり一般に再生は認められていない。しかしフランクルの「幾つもの身体的存在を超えて持続する」といった表現や、別の箇所での「反復される身体的存在[39]」「個々の『受肉』を超えて持続する精神的人格[40]」といった表現からしても、さらには次に述べるように過去の人生の記憶に言及していることからしても、再生があると考えていることは間違いない。

フランクルによれば、身体を失った（身体から離れた）精神的人格はやがて別の身体に宿る。ただしそのことが自覚されているわけではいない。これは、われわれが過去の人生（誕生前の別の人生）を覚えていないという事実に照らしても明らかである。フランクルは、精神的人格が身体の死滅後も生き続けることと、それが自覚されていないことの間に矛盾はないとする[41]。

> 精神的人格の連続性、個々の「受肉」を超えて持続する精神的人格の同一性が、その当の精神的人格自身には生涯にわたって自覚されないということ、このことは驚くに当たりません。というのは、例えばわれわれが夢を見、目覚め、また眠って夢を見続けるという場合、その二つの夢の間で目覚めたということは、その夢を見ているわれわれにはほとんど意識されないからです。

このことは、フランクルが精神の無意識というものを認めていることからも説明できる。フロイト（Sigmund Freud, 1856～1939）以降、無意識は衝動的なもの、エス的なものとして理解される傾向が強い中、フランクルは精神的な無意識の存在を主張しており、精神的人格の中心といえるものは無意識だと述べている[42]。したがって精神的人格が生まれ変わっていたとしても、それが自覚できないということは何ら不思議ではない。

これに関して、フランクルがインドのウパニシャッド（Upaniṣad）の中心思想とされる「汝はそれである（tat tvam asi）」に言及している点が注

---

39 「ここでわれわれが対決せねばならない問題は、それゆえ、反復される身体的存在や霊魂の遍歴といったことの根本的可能性の問題にほかなりません」（〔LM, 132〕〔フランクル 2000, 185〕）。

40 〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 185〕。

41 〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 185〕。

42 〔UG〕〔フランクル 2002a〕。この点については稿を改めて論じる予定である。

目される[43]。なおインドでも通常、輪廻は自覚されないと考えられている。

このような精神的人格の同一性が秘められたものであるということに類似した考えは、時間的ではなく空間的な、連続的ではなく並存的な同一性としては、インドの「汝はそれである」という格言に現れている知恵の究極の立場に見ることができます。この知恵によれば、精神的人格の同一性は一般にその人の存命中には自覚されることができず、それが自覚されるのは、やっと「幻影の覆い」が破れたときであるとされています。

西洋に輪廻思想がなかったわけではないが、一般に輪廻といえばインド思想を思い浮かべる人が多い。フランクルもインド思想、それも輪廻に関係する思想について、ある程度の関心をもっていたことがうかがわれる。このような点は、フランクルが再生に関心をもっていたことの証拠といえるだろう。

さて前述した通り不死と再生は区別される。不死は再生があることをかならずしも意味していない。ユダヤ・キリスト教的な発想では、精神的人格は天国に行くことはあっても、その後で地上に戻って来るとは考えられていない。またこれまで見てきたように、フランクルは精神的人格が不死だと考えられる理由を挙げてはいるものの、再生すると考えられる理由については言及していない。なぜフランクルは、精神的人格が再び身体に宿ると考えているのだろう。

本稿 1 において A～C について説明した。フランクルの場合、ここで明確に述べられているわけではないものの、そのうちの B、すなわち「人間（人類）は経験を重ねることによって向上・進歩・進化する」ことが前提になっていることが推測される。（そのように考えないと、再生を主張していること自体が不可解である。）

西洋近代においては、再生の思想が伝統思想とは直接には無関係の形でも主張されるようになる。後述するレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729～1781）はその典型である。また有名なところではカント（Immanuel Kant, 1724～1804）の思想も、（一般的な解釈ではないものの）同じ方向を

43 〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 186〕。

向いたものとして解釈することが可能だと考えられる。

カントは、人間が目的の王国に至るためには、人間が限りなく進歩しなければならないと考える。しかし人間の生涯は、そのためにはあまりにも短い。したがって霊魂は不死でなければならないとする。

カントはこのような主張をする中で、再生に言及しているわけではない。しかしカントが、死後の人間がどのような状態で進歩を続けると考えていたのかは、大いに気になるところである。彼が一般的なキリスト教信仰をもっていたとすると、人間は死後、天国においても進歩を続けると考えていたのだろうか。仮にそうだとすれば、地上の人生の短さなど何の問題にもならないし、そもそも地上に生まれる必要すらなくなってしまいかねない。カントの理論を敷衍することによって、そこから再生の主張を導き出すことは比較的容易であるようにも思われる。

ここにフランクルの思想をあてはめると、次のように考えられる[44]。彼は苦悩することそれ自体に大きな意味を見出している。苦悩によってこそ人間は成長すると考えている。後述するように、彼によれば死によって時間は失われるため、死後の精神的人格は経験を積むことができない。したがって成長する機会は生きている間にしかない。となれば、人間が限りなく成長を続けるためには再生がどうしても必要になる。

以上は推測ではあるが、フランクルはこのような考えから再生を主張したものと考えられる。

ところで、フランクルは死と再生の間をどのようなものと考えていたのだろう。以上に見てきたように、フランクルは不死、さらには再生の可能性を明確に認めている。ただしここでフランクルが主張するのは、あくまでも死を超えての「精神の持続」であって、それ以上でも以下でもない。彼は次のように述べている[45]。

> なぜなら、人間は死の瞬間に、たんに意識、時間の意識を失うだけではなく、時間そのものをも失うからです。人間は、そもそも誕生の

---

44 フランクルはカントの思想を熟知しており、著作や講演の中でもしばしば言及している。

45 〔LM, 133〕〔フランクル 2000, 187〕。

時点ではじめて時間を獲得し、またそれとまったく同じように、死においてそれを喪失するのです。

人間は誕生によって時間を獲得し、死によってそれを失うのだという。したがって死から次の誕生までは時間が存在しないことになる。これは、単に時間を意識できないのではなく、時間を失っており、時間が存在しない状態なのだという[46]。つまりフランクルの考えによれば、死から次の誕生まで、精神は何もできないし、何も自覚できないということになるのであろう。

4 シュタイナーにおける「再生」

次にシュタイナーにおける再生の思想について見ていく。彼はフランクルよりもはるかに明確に再生について語っている。

4.1 再生 (1)

本稿 1 で説明した A～C のうち、フランクルが A を強調したのに対し、シュタイナーは B と C を強調する。まずは C、すなわち「各々の人格・自我は他と異なる唯一の、かけがいのない存在である」という点から見ていくことにしよう。

シュタイナーは人間一人一人が一つの種（しゅ）だとしており、それを根拠に再生があることを主張する。一般に、人間（一個人）はヒトという種の一員だと考えられている。そしてヒトという種はライオン、ハトなどと同列に置かれるものと考えられている。しかしシュタイナーによれば、ライオン、ハトと同列に置かれるのは、人間の場合、ヒトという種ではなく一個人である。つまり人間の場合は全員でヒトという一つの種に属しているのではなく、各々が、個々人が一つの種だというのである。言い換えれば、ある人と別の人との違いは、ライオンとハトとの違いほど大きいということになる。

なぜそのようなことが言えるのか。まずライオンやハトについて次のように述べる[47]。

---

46 時間が存在しない状態というものを、フランクルがどのように考えていたのかは興味深い。しかしこの点についてはこれ以上の説明をしておらず、詳細は不明である。

47 〔TS, 61〕〔シュタイナー2000a, 67〕。

ライオンやハトの一生は、ライオンやハトの種に属しているという点においてのみ、意味をもちます。ライオンやハトの種について記述すれば、私たちは個々のライオンやハトを、すべての本質において理解したことになります。

しかし人間の場合、それとはまったく事情が異なる[48]。

ところが私たち人間は単なる種や属の一員ではなく、個人となるときに、ようやく本当の意味における人間となるのです。たとえばその息子や父親について記述したとしても、私はクレーヴィンケルに住んでいるシュルツェ氏という人物についてまったく理解したことにはなりません。私はシュルツェ氏自身の人生の歩みを知らなくてはなりません。人間の人生の歩みの本質についてよく考えてみるとき、私たちは、精神的な観点から見るとそれぞれの人間は一人で一つの種になっているという事実に気づきます。

ライオンやハトの場合、その種に属する一個体について記述すれば、その内容は他の個体にも基本的にそのままあてはまるという[49]。たしかに種が同じであれば、一個体の基本的な行動パターン、性質、好むエサ、繁殖の時期などは、みな他の個体にもあてはまる。種の個体全体が夜行性なのに、ある個体だけが昼行性であるとか、種の個体全体が食べるエサを、ある個体だけは好まない‥‥といったことは考えにくい。

しかし人間の場合、それは通用しない。それが息子や父親という非常に近い人物であったとしても、その息子や父親を理解したからといって、当人を理解したことにはならない。だからこそ人間には伝記があるのに、他の生物には伝記が存在しないのだ、とも述べている[50]。個体ごとに大きな違いがなければ、伝記は無意味である。

たしかに人間の場合、基本的な行動パターンなどは一人一人異なっている。人間は基本的には昼行性といえるが、現代では夜行性ともいえる生活を続ける人は少なくない。食べ物の好みも個々人で異なるし、世界全体を見渡せば

---

48 〔TS, 61〕〔シュタイナー2000a, 67-68〕。
49 これはそれぞれの個体を識別できないといった意味ではない。
50 〔TS, 61〕〔シュタイナー2000a, 67〕。

驚くほど多様である。人間一人一人の違いはそれほどまでに大きい。

ただし一人一人が種だといえるのは、あくまでも精神に注目した場合の話である。身体に注目すれば、人間どうしの類似点は明らかであり、間違いなくヒトという種の一員である。特に肉親との類似については、誰もが例外なく認めているといってよい。では精神の場合はどうなのだろう、と彼は問いかける[51]。

> たとえば私は人間の先祖から生まれることによって、私の物質的な人間の形姿を受け取りました。では私は、私の人生の歩みのなかに生じる要素をどこから受け取ったのでしょうか。私は物質的な人間として、私の先祖の形姿を繰り返します。では私は精神的な人間として、何を繰り返しているのでしょうか。

我々の身体も精神も、無から突然発生したわけではない。このうち身体(遺伝的要素など) については両親、あるいはさらなる先祖からもたらされたものと理解することができる。では精神はどこからもたらされたのだろう。

もしも精神がどこからももたらされていない、ということになれば、精神が無から発生したことになってしまう。かといって、両親と比較しても大きく異なる個性をもつ精神が、遺伝のように先祖からもたらされたと考えることはできない。このように考えた彼は、次のような結論を述べる[52]。

> むしろ精神的な存在としての私は、ある精神的な存在がふたたび地上に戻ってきたものであるに違いありません。

さらにこれを次のようにも言い換えている[53]。

> 物質的な人間の形姿は、人間という種の本質のたえまない繰り返し、すなわち再受肉であり、精神的な人間は同じ一人の精神的な人間の再受肉です。なぜなら精神的な人間として、一人一人の人間はまさに自分自身の種となっているからです。

我々の身体についていえば、誰もがヒトという種の一員である。しかし精神はそうではない。精神については一人が一つの種となっている。そしてそ

---

51 〔TS, 62〕〔シュタイナー2000a, 69〕。
52 〔TS, 62〕〔シュタイナー2000a, 70〕。
53 〔TS, 63〕〔シュタイナー2000a, 71〕。

のような精神は再生を繰り返している。ここに種という概念を適用するならば、現在の人生の精神、前の人生の精神、その前の人生の精神‥‥が同じ一つの種に属すると考えられる。つまり一つの種である一つの精神が、繰り返し再生しているのである。

このような見解はフランクルには見られない。とはいえフランクルも一人一人がまったく異なった存在であることを強調し、人生の意味についてもその人だけの、その状況限りの意味というものを考えている。そして、その役割を他の人が交代することは絶対にできないとしている。

この考えを敷衍していけば、シュタイナーのような考えに近づいた可能性は否定できないように思われる。とはいえ実際には、これらの点を不死や再生と結びつけることまではしてない。

現在では、遺伝ですべてが説明できると考える人が多い。しかしシュタイナーはこのような見解に反対する。たとえばバッハの家系には、250 年間に 29 人の音楽家が生まれているという。ここから、人間のあらゆる能力（精神的な要素を含む）は遺伝すると考えられがちである。しかしシュタイナーは、この場合、優れた音楽家に必要な耳（という身体的な要素）が遺伝しているのであって、音楽の才能（すなわち精神的な要素）そのものが遺伝しているわけではないと主張する[54]。

4.2 再生 (2)

続いて A～C の中の B、すなわち「人間（人類）は経験を重ねることによって向上・進歩・進化する」について見てみよう。一般に再生（輪廻）といえばインド思想と結びつけられがちであり、特にシュタイナーの時代には、再生の思想は当然のごとく仏教思想と結びつけられて理解されていた[55]。しかしシュタイナーはそのような理解を批判する。

たしかに仏教は再生を説いている。しかしそれは再生に価値を認めるものではない。むしろその価値をできるだけ低く評価し、また再生の回数をできるだけ少なくすることを目指している。仏教の教えとは再生から解き放たれ

---

54 〔TR, 86〕〔シュタイナー1985, 95〕。
55 〔Buddha, 60〕〔シュタイナー2009, 28〕。

ること、すなわち解脱をその本質としている[56]。そのような意味において、仏教と再生を結びつけるのは、古代の芸術作品に対する最高の理解を、それを破壊してしまった中世初期の人々に求めるようなものに他ならないという[57]。

ここから明らかになるのは、シュタイナーが仏教とは異なって再生を肯定的に捉え、その価値を認めていることである。再生することには、人間にとって大きな意味がある。これに対し仏教が解脱を求めるのは、再生の価値を否定的にしか捉えていないことを示している。したがって、そのような仏教の思想を通じて再生を理解する、評価するのは誤りだというのがシュタイナーの主張である。

仏教に代わってシュタイナーが評価する、あるいは注目するのはレッシングの思想である。西洋にも古代・中世において再生（輪廻）の思想が存在した。しかし近代になってから、そのような伝統思想からも、また仏教やヒンドゥー教などのインド思想からも切り離された形で再生に言及したのは、レッシングが初めてではないかと言われている。彼は「人類の教育（Erziehung des Menschengeschlechts＝EM）」という論文[58]において、その最後の部分で再生に言及している。

シュタイナーが「人類の教育」を高く評価している大きな理由は 2 つあると考えられる。1 つは、信仰からある程度距離をとった形でこの思想が生まれていること、もう 1 つは再生を肯定的に捉えていることである。まずは前者から見ていこう。

著名なゲーテ研究者であったシュタイナーは、まずゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749～1832）にインド思想のからの影響がほとんど見られないことに注目する。実際、ゲーテにはイスラーム思想の影響が見られ、ムハンマドなどについても言及してはいるが、インド思想からの影響はほとんど見られない[59]。インド思想から影響が見られるようになるのは、あ

---

56 〔Buddha, 61〕〔シュタイナー2009, 28〕。
57 〔Buddha, 60〕〔シュタイナー2009, 27〕。
58 1777 年に前半のみが発表され、1780 年に全体が発表されている。
59 「現代の多くの人々の中には、ブッダ情緒とでも名づけられるようなものが存在

る面においてはゲーテの弟子ともいえるショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788～1860）からになる。周知のように、ショーペンハウアーの場合、インド思想からの非常に強い影響が見られる[60]。しかしレッシングはゲーテよりもさらに前の人物であり[61]、インド思想からの影響はまったく見られない。したがってレッシングは仏教などのインド思想とは無関係に、再生の思想にたどりついたものと考えられる。シュタイナーは次のように述べている[62]。

> なぜならば、ヨーロッパ精神史の中で、地上の生の回帰という思想が壮大な形をとって現れたのは、絶対に仏教的思考方法に影響を受けていない人物、すなわちレッシングにおいてであったからであり、彼のもっとも円熟した論文「人類の教育」においてであったからである。

レッシングは、宗教的には比較的寛容な立場をとっていたことが知られているが、彼自身は間違いなくキリスト教徒であった。キリスト教徒である彼が、信仰の立場から再生を説くということは考えにくい。彼の再生の思想は神への信仰が大前提とされてはいるものの、けっして盲目的な信仰ではなく、再生が必然的に導かれることを主張している[63]。

> 地上生活が何度でも繰り返されるという「輪廻転生」の観点は、太古の時代から人類が知っていた「彼岸」の観念に学問や哲学が暗いヴェールを被せてしまう以前には、人類の最大の関心事でした。レッシングは、この太古の観点が現代人にとって時代遅れの妄想であることにはならない、と明言しているのです。私たちはレッシングに限らず、人類文化の進歩に寄与した最高の人物たちと、まさにこの点で一致しています。

2 点目の、レッシングが再生を肯定的に捉えている点について見ていこう。

する。ゲーテの中には、このブッダ情緒はまだ存在しなかった」（〔Buddha, 84〕〔シュタイナー2009, 60〕）。

60 〔Buddha, 60〕〔シュタイナー2009, 27〕。

61 ゲーテよりも生年は 20 年早く、没年にいたっては 50 年早い。またショーペンハウアーが生まれる前に没している。

62 〔Buddha, 61〕〔シュタイナー2009, 29〕。

63 〔IWM, 42〕〔シュタイナー2006, 45〕。

この主張は仏教の再生の思想との違いを際立たせることになる。

両者の思想は何が違うのだろうか。仏教の場合、地上に回帰する回数をできるだけ少なくすることを目標にしている。仏教では再生がむしろ絶望や恐怖と結びつけられてきた[64]。この世は苦しみであるから、再生とは苦しみの世界への誕生に他ならない。しかも自分の悪行が報いをもたらし、そもそも人間として生まれるという保証すらない。このような苦しみから逃れるために修行をし、解脱しようと説くのが仏教の教えである。解脱とは二度と再生しないことであるから、仏教とは再生から逃れることを説く教え、再生しないための教えだということができる。これに対しレッシングは、何度も再生することによって人間は向上するという考え方を示している。単純に考えれば、再生の回数が多ければ多いほど、人間は向上できるということになるだろう。

また仏教では個々人に目を向けるのに対し、西洋では全人類に目を向けるという違いを指摘する[65]。

> 西洋では、道がまったく違うのです。仏教は、個々の心魂を見つめます。それに対して西洋人のまなざしは、全人類の要件に向けられています。西洋人は、自分があらゆる人に、単一の有機体として結びついていると感じます。

仏教では一個人の解脱だけが問題にされ、他者あるいは社会といった視点が前面に出ることはない[66]。全人類の進歩発展などという考えからはほど遠いものとなっている。これに対しレッシングは、ここで全人類の進歩発展を問題にしており、一個人の問題はほとんど考慮されていない。そしてこの進歩発展の高い目標を考えた時に、必然的に再生の考えに至る。シュタイナーはレッシングの考えを次のように理解している[67]。

---

64 わが国では、しばしば再生がある種の希望と結びつけて語られてきたこともあり（江戸時代に、身分の異なる男女が「生まれ変わって結婚しよう」と心中する、卑劣な手段で殺されそうになった人が「生まれ変わって恨みを晴らそう」と考える等々）このことが理解されにくい。しかし「人生は苦である」と見るのが仏教の基本的な立場である。

65 〔JC, 70-71〕〔シュタイナー2003, 34〕。

66 後に誕生する大乗仏教になると、このような視点が含まれるようになる。

67 〔JC, 70〕〔シュタイナー2003, 33〕。

「‥‥（略）‥‥その心魂がのちの時代にふたたび現れたら、以前の人生の成果をつぎの人生にたずさえていくことができる。第二の人生の成果は、第三の人生にたずさえていかれる」という考えです。そのように連続的・段階的に深化していくのです。心魂は、努力して手に入れたものを、単にみずからのためではなく、全人類のために達成したのです。人類は大きな有機体であり、レッシングにとって輪廻は、全人類が前進できるために必要なものなのです。このように、歴史の発展、全人類の要件が、レッシングを輪廻の認知へと駆り立てました。

ここに述べられている「以前の人生の成果をつぎの人生にたずさえていくことができる」というのは、前の人生の記憶が残っている、といったような意味ではない。簡単にいえば、前の人生で多少なりとも向上・進歩し、最後に到達したレベルから次の人生が始まるということである。つまり前の人生における努力の成果は、死んだからといって無駄にはならず、その後の努力はその上に積み重ねられることになる。

レッシングの再生の思想と仏教の再生の思想は、共に再生の思想ではあるが、その内容はまったく異なるものだとシュタイナーは主張する。そしてシュタイナーの再生の思想も、大筋ではレッシングの思想の方向に一致するものとなっている。

むすびとして

ここまで、シュタイナーとフランクルの再生についての思想を検討してきた。最後に主なポイントだけ繰り返しておこう。

両者は不死と再生を認めている。しかし、いわゆる心霊研究に対しては明確に批判的な態度をとっている。心霊研究の手法が唯物論的であるということが、その最大の理由である。

再生について、フランクルが寡黙であるのに対し、シュタイナーはむしろ多弁である。とはいえフランクルも、「人間（人類）は経験を重ねることによって向上・進歩・進化する」と考えており、そのために再生には大きな意義があることを認めている。

シュタイナーも「人間（人類）は経験を重ねることによって向上・進歩・

進化する」と考えている。彼はレッシングの思想と仏教の思想を比較し、前者が再生に積極的な意義を認めるのに対し、仏教がそのような意義を認めていないことを指摘する。そしてレッシングの思想こそが、自らの意に適うものだと考えている。

付論 レッシング「人類の教育」について

本論で言及したレッシングの見解について、簡単に見ておくことにしよう。レッシングは啓蒙思想家であり、宗教的寛容を説いた人物として知られる[68]。とはいえ 18 世紀という時代的制約などから、彼の視野に入っているのは基本的にはユダヤ教とキリスト教（の諸教派）である。一読して明らかなように、この論文はユダヤーキリスト教的な立場から著されている。同時に、そのような論文であるにもかかわらず、再生が説かれていることは大いに注目される。少なくとも再生に関しては、単純に彼の信仰の立場を表明したものとは考えにくい。

彼はこの論文を次のような言葉で始める[69]。

1. 一個人において教育であるものが、全人類においては啓示である。
2. 教育は一個人になされる啓示であり、啓示は全人類になされてきた、そして今もなされつつある教育である。

彼によれば、神は人類を教育している。宗教とはそのような教育のために存在する。彼はこのような啓示が順を追って、段階的になされてきたと考えている。簡潔にまとめるなら、①旧約聖書の段階、②新約聖書の段階、③理性的真理の段階、ということになる。まずは①旧約聖書の段階については次のように述べる[70]。

8. ‥‥（略）‥‥神は自分の特別な教育のために、ある一つの民族を選んだ。しかも、まったくの初めから始めることができるように、もっとも粗野で野蛮な民族を。

---

[68] *Nathan der Weise*（『賢者ナータン』）はそのような立場から著された代表作である。

[69] 〔EM, 75〕〔レッシング 1976, 129-130〕。この文章は 100 のセクションからなる。各行の冒頭の数字はその番号である。（以下においても同様。）

[70] 〔EM, 76〕〔レッシング 1976, 131〕。

そして旧約聖書の記述に基づき、神がユダヤ民族に対してどのようにふるまったかが説明される。やがてキリストが現れ、②新約聖書の段階に移る[71]。

53. よりすぐれた教師が現れて、この子どもから使い尽くした教科書を取り上げなくてはならなかった―キリストが現れた。

54. 神が教育を施そうと計画していた人類の一民族が‥‥（略）‥‥教育の大きな第二段階に進むべく成熟した。

64. これらの教えは、しばらくのちの新約の諸書に採録されたが、経験からして少なくとも、この新約の諸書が人類にとって二番目の最良の教科書であったし、今もそうであるということはすでに明らかである。

やがて③理性的真理の段階がやってくる。その視点から見れば、②の段階はあくまでも③の前段階とみなされる[72]。

76. ‥‥（略）‥‥啓示的真理を理性的真理へと変えていくことは、それを人類に役立てるためにはまったく必要なことであるのだから。それが啓示された段階では、もちろんまだ理性的真理ではなかったわけだが、しかしのちに理性的真理になるためにこそ、それは啓示されたのである。‥‥（略）‥‥。

77. ‥‥（略）‥‥人間の理性が自らの力だけで正しい概念を得ることはできなかったであろうから、我々がある宗教によってそれらの正しい概念へと導かれることはあっても良いはずではないか。たとえその宗教の歴史的真実性は微妙な点があると言えなくはないとしても。

こうして話題は人類の最高段階、教育の最終目標へと移っていく[73]。

81. それとも、人類はこの自立と純化の最高段階にはけっしてたどり着かないというのだろうか。けっして？

82. けっして？ ―それは神への冒涜というものではないか。―教育には目標がある。一個人の教育にも、人類全体の教育にも。教育されるものは、何かになるようにと教育されるのである。

84. それが、人間による教育の目標であるならば、神による教育にそれが

---

71 〔EM, 88-91〕〔レッシング 1976, 141-142〕。
72 〔EM, 94-95〕〔レッシング 1976, 145〕。
73 〔EM, 96〕〔レッシング 1976, 146〕。

不可能であろうか。個人を教育する手段である学芸にできることが、人類全体を教育する手段である自然にできないことがろうか。それでは冒涜もはなはだしいというものだ。

85. いや、完成の時は来るだろう、必ず来るだろう。‥‥（略）‥‥

レッシングによれば、教育とはその目標となる最高段階へと個人を導こうとするものである。だとすれば、神による教育も人類を最高段階へと導こうとするものでなければならない。もしもそれができない（つまり、神にとって不可能だ）と言うなら、それは神に対する冒涜になる。したがって、そのようなことはあり得ない。人類は神によって、必ずや最高段階へと導かれるはずである[74]。

86. 新しい、永遠の福音の時は必ず来るだろう。それは、新しい契約の教科書にも約束されている。

87. 13, 4 世紀の夢想家たちも、この新しい契約の光を垣間見ていたのかもしれない。ただ彼らは、それが今にもやって来るかのように予言した点で誤っていた。

人類は最高段階へと導かれるのだが、それはすぐに達成されることではない。すぐに達成されると考えた人々は誤っていたのである。

達成されることが確実であっても、その達成までには膨大な時間が必要になるだろう。そしてそれは人間の寿命よりもはるかに長い時間であろう。つまり生きている間にはとうてい達成できないわけで、達成には次の、さらにはその次の‥‥人生が必要になる。そしてこのことから、再生が理論的に要請される。再生がなければ、人類は最高段階に達することができないし、それを認めることは神を冒涜することになる。このようにしてレッシングは、再生は当然あるはずだ、という結論を導く[75]。

90. ‥‥（略）‥‥自分はもう一度生まれてくるだろうか、そう信じていいだろうか、と。―他のことなら必要以上に熱心に信じる人びとが、これを信じようとしないとは奇妙なことである。

94. ‥‥（略）‥‥しかし、人間はこの世に一回しか存在できないと決ま

---

74 〔EM, 96-97〕〔レッシング 1976, 147〕。
75 〔EM, 97-99〕〔レッシング 1976, 146-148〕。

っているだろうか。

95. この仮説はもっとも古くからあるものだが、だからといって馬鹿げた仮説だろうか。人間の悟性が、まだ学校の詭弁に毒される前にこの仮説に到達したからといって、誰がそれを馬鹿げた仮説だと言えようか。

98. そのたびに新しい知識、新しい能力を得るべくこの世に送られる限り、何度でも再生していいはずではないか。あるときあまりに多くをふいにしてしまい、そのためにもはや再生の価値なしとされたのだ、というのだろうか。

人類は何度も生まれ変わることによって、新しい知識・能力を獲得する。そうすることで自分を向上させていく。この繰り返しによって、いつの日か最高段階に達する。レッシングはこのように考えている。

なお、我々が前の人生の記憶をもっていないことについては、次のように述べている[76]。

99. それとも、私がかつてこの世に存在したことを忘れているから、再生の価値はないというのだろうか。それを忘れている私こそ幸いである。そのような記憶は、現状を悪用することにしか役立つまいから。それに、私が今さしあたり忘れていなくてはならないからといって、それはもう絶対に思い出されないと言うのだろうか。

略号と参考文献

・　本稿では引用に際し、文意を損なわない範囲で手を加えることがある。（ルビを省略する、傍点を省略する、字間開けを省略する、漢数字を算用数字に改める、改行を無視するなど。）

・　邦訳には注に示した訳書を用いることを原則とするが、訳語や文体の統一などを目的として筆者が訳し直すことがある。また文意を明確にするために原語を補うことがある。

[76] 〔EM, 99〕〔レッシング 1976, 148〕。

１．R. シュタイナーの著作・講演

シュタイナーの著作・講演（のうち記録が残されているもの）はすべて Rudolf Steiner Verlag 社の全集（Gesamtausgabe, GA）に収録されている。本稿では原則として、この全集に基づく同社の小型版（Taschenbuch, Tb）を使用。

Buddha = “Buddha.” 1911 年の講演。*Antworten der Geistes-wissenschaft auf die grossen Fragen des Daseins*（GA60）に収録。GA60 および GA61 *(Menschengeschichte im Lichte der Geistesforschung)* から一部の講演を抜粋した Tb609 *(Wendepunkte des Geisteslebens)* の 1984 年版（邦訳は〔シュタイナー2009〕）を使用。

GWU = *Die Geheimwissenschaft im Umriß*（GA13）. 初版は 1910 年。Tb601 の 2005 年版（邦訳は〔シュタイナー1992〕）を使用。

IWM = *Inneres Wesen des Menschen und Leben zwischen Tod und neuer Geburt*（GA153）. 1914 年の講演。TB663 の 1995 年版（邦訳は〔シュタイナー2006〕）を使用。

JC = *Von Jesus zu Christus*（GA131）. 1911 年の講演。Tb131 の 2010 年版（邦訳は〔シュタイナー2003〕）を使用。

OK = *Die Offenbarungen des Karma*（GA120）. 1910 年の講演。Tb620 の 2003 年版（邦訳は〔シュタイナー1996〕）を使用。

TR = *Die Theosophie des Rosenkreuzers*（GA99）. 1907 年の講演。Tb643 の 2005 年版（邦訳は〔シュタイナー1985〕）を使用。

TS = *Theosophie*（GA9）. 初版は 1904 年。Tb615 の 2005 年版（邦訳は〔シュタイナー2000a〕）を使用。

２．V. E. フランクルの著作・講演

ÄS = *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalse.* 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。1982 年まで大幅な加筆・修正が行われ、分量的にほぼ 2 倍になっている。dtv Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG 社の 2015 年版、6.Auflage（邦訳は〔フランクル 2011〕）を使用。

HP = *Homo patiens: Versuch einer Pathodizee.* 初版は Franz Deuticke 社、1951 年。UM と合冊され LM になる（1975 年）。LM を参照。

LM = *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie.* HP と UM の合冊（1975 年）。1984 年に増補改訂。Verlag Hans Huber 社の 2005 年版、3.Auflage（邦訳は〔フランクル 2000〕〔フランクル 2004〕）を使用。

SWL = "Von Sinn und Wert des Lebns." 1947 年の講演 "...Trotzdem Ja zum Leben sagen" を 1981 年に改訂したもの。R. Piper 社の *Die Sinnfrage in der Psychotherapie,* 1988 年版、3.Auflage（邦訳は〔フランクル 1993〕）を使用。

TJLS = *...trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslagerer.* 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。Kösel-Verlag 社の 2015 年版、7.Auflage（邦訳は〔フランクル 1993〕）を使用。

UG = *Der unbewußte Gott: Psychotherapie und Religion.* 初版は Kösel-Verlag 社、1948 年。dtv Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG 社の 2015 年版、13.Auflage（邦訳は〔フランクル 2002a〕）を使用。

UM = *Der unbedingte Mensch: Metaklinische Vorlesungen.* 初版は Franz Deuticke 社、1949 年。HP と合冊され LM になる（1975 年）。LM を参照。

３．M. シェーラーおよび G. E. レッシングの著作

TF＝"Tod und Fortleben." シェーラーの遺稿。初版は *Zur Ethik und Erkenntnislehre,* 1933 年に収録。*Max Scheler, Schriften aus dem Nachlass, BandI:* Bouvier Verlag Herbert Grundmann 社の 1986 版、3Auflage（邦訳は〔シェーラー1977〕）を使用。

EM＝"Die Erziehung des Menschengeschlechts." レッシングによる 1780 年の論文。*Gotthold Ephraim Lessing Werke 1778-1781:* Deutscher Klassiker Verlag 社の 2001 年版（邦訳は〔レッシング 1976〕）を使用。

４．その他の文献

シェーラー1977：シェーラー，マックス（小倉貞秀訳）「死と永生」（シェーラー，マックス『シェーラー著作集 6』白水社、所収）

シェーラー2002a：シェーラー，マックス（吉沢伝三郎訳）『シェーラー著作集 1 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（上）（新装復刊）』白水社

シェーラー2002b：シェーラー，マックス（吉沢伝三郎・岡田紀子訳）『シェーラー著作集 2 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（中）（新装復刊）』白水社

シェーラー2002c：シェーラー，マックス（小倉志祥訳）『シェーラー著作集 3 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（下）（新装復刊）』白水社

シュタイナー1985：シュタイナー，ルドルフ（西川隆範訳）『薔薇十字会の神智学』平河出版社

シュタイナー1992：シュタイナー，ルドルフ（西川隆範訳）『神秘学概論』イザラ書房

シュタイナー1996：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『シュタイナーのカルマ論――カルマの開示』春秋社

シュタイナー1998：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『神秘学概論』筑摩書房

シュタイナー2000a：シュタイナー，ルドルフ（松浦賢訳）『テオゾフィー　神智学』柏書房

シュタイナー2000b：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『神智学』筑摩書房

シュタイナー2002：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『自由の哲学』ちくま学芸文庫

シュタイナー2003：シュタイナー，ルドルフ（西川隆範訳）『イエスからキリストへ』アルテ

シュタイナー2006：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『シュタイナーの死者の書』ちくま学芸文庫

シュタイナー2009：シュタイナー，ルドルフ（新田義之訳）「仏陀」（新田義之編訳『人智学・神秘主義・仏教』所収）

シュタイナー2016：シュタイナー，ルドルフ（森章吾訳）『ゲーテ的世界観の認識論要綱』イザラ書房

寺石 2016：寺石悦章「シュタイナーとフランクル　比較の試み」（『人間科学』第 35 号所収）

寺石 2017a：寺石悦章「シュタイナーとフランクル　精神と心魂をめぐって」（『人間科学』第 36 号所収）

寺石 2017b：寺石悦章「シュタイナーとフランクル　死と不死をめぐって」（『人間科学』第 37 号所収）

ブラム 2007：ブラム，デボラ（鈴木恵訳）『幽霊を捕まえようとした科学者たち』文藝春秋

フランクル 1985：フランクル，ヴィクトール・E.（霜山徳爾訳）『夜と霧 ――ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房

フランクル 1993：フランクル，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳訳）『それでも人生にイエスと言う』春秋社

フランクル 1997：フランクル，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳訳）『宿命を超えて、自己を超えて』春秋社

フランクル 2000：フランクル，ヴィクトール・E.（山田邦男監訳）『制約されざる人間』春秋社

フランクル 2002a：フランクル，ヴィクトール・E.（佐野利勝・木村敏訳）『フランクル・セレクション 3　識られざる神』みすず書房

フランクル 2002b：フランクル，ヴィクトール・E.（池田香代子訳）『夜と霧　（新版）』みすず書房

フランクル 2004：フランクル，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳訳）『苦悩する人間』春秋社

フランクル 2011：フランクル，ヴィクトール・E.（山田邦男監訳）『人間とは何か――実存的精神療法』春秋社

ベロフ 1998：ベロフ，ジョン（笠原敏雄訳）『超心理学史』日本教文社

ベロフ編 1986：ベロフ，ジョン編（井村宏次・岩本道人・鈴木孝彦訳）

『パラサイコロジー』工作舎
ホーン 2011：ホーン，ステイシー（ナカイサヤカ訳）『超常現象を科学にした男』紀伊国屋書店
諸富 1997：諸富祥彦『フランクル心理学入門――どんな時も人生には意味がある』コスモス・ライブラリー
諸富 2016：諸富祥彦『知の教科書　フランクル』講談社選書メチエ
山田編 2002：山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社
レッシング 1976：レッシング，ゴットホルト・エフライム（有川貫太郎訳）「人類の教育」（『世界文学全集 17 レッシング／シラー／クライスト』講談社、所収）